

新・瘠我慢の説

經濟學者
渡辺利夫

第十回 脱亜論とは何か

李朝時代の朝鮮半島を四度にわたり調査旅行したイギリスの人類学者イザベラ・バードは『朝鮮紀行—英国婦人の見た李朝末期』(時岡敬子訳、講談社学術文庫)の中で次のように記している。

するのである」

「朝鮮国内は全土が官僚主義に色濃く染まっています。官僚主義のおびただしくはびこっているばかりではなく、政府の機構全体が悪習そのもの、底もなければ汀もない腐敗の海、略奪の機関で、あらゆる勤勉の芽という芽をつぶしてしまふ。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が急速に衰退しても、被支配層を食いものにする権利だけは存続

するのである」
李朝末期の朝鮮は、救いがたいほどまでに「末期的」であった。金玉均などの開化派は、事大党といわれる守旧派の政府要人を殺害、直後に開化派官僚からなる新政府を樹立するというクーデターを企てた。福澤がこの計画にどう関わっていたのかを証す資料はないが、福澤の強い精神的支持を受けての決行であったことが想像される。

明治十七年(一八八四)十二月四日、郵政局開局を祝する式典と宴が開かれ、ここに集う守旧派の権力者を一網打尽、翌五日の未明に国王の裁可

するのである」
李朝末期の朝鮮は、救いがたいほどまでに「末期的」であった。金玉均などの開化派は、事大党といわれる守旧派の政府要人を殺害、直後に開化派官僚からなる新政府を樹立するというクーデターを企てた。福澤がこの計画にどう関わっていたのかを証す資料はないが、福澤の強い精神的支持を受けての決行であったことが想像される。

を得て新政府樹立。清国への朝貢廃止、門地門閥制度廃止などを新政令でうたつた。後者は「門閥を廃止し、人民平等の権を制定し、才を以て官を選び、官を以て人を用ゐることなきこと」であるが、表現にまで福澤の意思が投影されている。

クーデター発生の報を受けた袁世凱は大軍を率いてソウルに向かい、開化派を蹴散らした。金玉均は朴泳孝とともに辛くも生き延び、仁川に停泊中の郵船会社の汽船の一室に身をひそめて日本へと向かい、落魄の身を福澤邸に寄せた。「三日天下」であった。開化派への刑罰は一族皆殺しの残酷刑であり、これを伝え聞いた福澤は明治十八年二月の『時事新報』の社説「朝鮮獨立党の處刑」にこう書いた。

「人間娑婆世界の地獄は朝鮮の京城に出現したり。我輩は此国を目して野蠻と評せんよりも、寧ろ妖魔悪鬼の地獄と云はんと欲する者なり。而して此地獄国の当局者は誰ぞと尋るに、事大党政府の官吏にして、其後見の実力を有する者は則ち支那人なり」

福澤が「脱亜論」を執筆したのは、右の論説の二十日後のことであった。執筆のきっかけが、事大党ならびに事大党を後援する清軍の冷酷無比な所業にあったことは確実である。「脱亜論」は、二千二百字程度のそれほど長い文章ではないが、日清戦争にいたる時期の日本の知識人の気分を生々しく浮かびあがらせる名説である。アジアにおいては、日本だけが維新を通じて文明化と近代化への帳を開くことができた。なぜなのか、と問うて福澤はこういう。

「我日本の士人は国を重しとし政府を軽しとするの大義に基き、又幸に帝室の神聖尊嚴に依頼して、断じて旧政府を倒して新政府を立て、國中朝野の別なく一切万事、西洋近時の文明を採り、独り日本の旧套を脱したるのみならず、亜細亞洲の中に在て新に一機軸を出し、主義とする所は唯脱亜の二字に在るのみ」

では、なぜ中国、朝鮮においては文明化と近代化が不可能なのか。

「この二国の者共は一身に就き又一国に關して開進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非ざれども、耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、その古風旧慣に恋々するの情は百千年の古に異ならず、この文明日新の活劇場に教育の事を論ずれば儒教主義と云い、学校の教旨は仁義礼智と称し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、その實際に於ては真理原則の知見なきのみか、道德さえ地を払うて殘刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し」

支那、朝鮮と一緒に成つて文明化を推進することなど不可能である。日本は彼らとは別の道を行き、支那より他なしとして、こゝろ結論する。

「今日の謀を為すに、我國は隣國の開明を待て共に亜細亞を興すの猶予あるべからず、寧ろ、その伍を脱して西洋の文明國と進退を共にし、その支那、朝鮮に接するの法も隣國なるが故にとて特別の會釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名

を免るべからず。我れは心に於て亜細亞東方の悪友を謝絶するものなり」

相當に激しい言説である。福澤はあまり婉曲な言ひ方は好まず、とかく誇張して表現する文章上の性癖がある。自分が強く期待していた開化派の人々に対する殘忍このうえない処刑のことを知って激憤に驅られ、直後にこのような文章を福澤が書いたとして不思議ではない。むしろ、執筆者の本音は、こういう文章の中にこそ鮮明に現れるのであろう。

これを機に、朝鮮への情動的な思い入れはやめ、西洋人が外國をそうみなしているようなパワーポリティクス論にめざめて朝鮮に対処していかなければならぬ。そういう自省が「脱亞論」の中にはある。「処分」とは穏やかではないが、せいぜい「対応」と読むのが正しい。「謝絶」も極端な物言ひとは思ふが、あくまで「我れは心に於て亜細亞東方の悪友を謝絶する」である。あれほどまでに熱い心根と義侠心をもって接してきた開化派への殘酷な

処刑の数々を演じたあの国とは、もうしばらくは付き合いたくはない。少なくとも心情においては謝絶したい、というのである。

私（筆者）が福澤諭吉に関心を持ち始めたころ、「脱亜論」はその後の日本のアジア侵略を正当化する議論の元凶^{げんきゆう}であるかのように語られていたものだが、おそらく福澤思想の全体像や脱亜論が草^{くさ}された時期の状況などを知らずに、「脱亜論」だけを読んで勝手に決めつけをやった低いレベルの話だったような気がする。

いわゆる従軍慰安婦問題、徴用工問題、竹島をめぐる領有権問題などの韓国の「反日」は、市民運動家を名乗る職業的左翼、そういう思想の色濃い政治家たちによって担^{にな}われ、ついにこれが国民運動となつて反日の再生産がなされるにいたっている。

従軍慰安婦問題では、二〇一五年の日韓合意において、この問題が「最終的かつ不可逆的に解決されることを確認する」とされたものの、文在寅^{ムンジェイン}政権においてこの合意は平然と破棄されてしまった。ま

た、徴用工問題では大法院（最高裁）により新日鐵住金や三菱重工業に対して損害賠償を求める判決が出された。かつて一九六五年の「日韓請求権並びに経済協力協定」において、両国間の請求権問題は「完全かつ最終的に解決されたことを確認する」と明記されていたにもかかわらず、である。

先の脱亜論の中での一節「真理原則の知見なきのみか、道徳さえ地を払うて殘刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し」という福澤の気分は、現在の日韓関係の文脈においてもなお真実なのであろう。

日本に対しては何を言っても許されるという政治的な雰囲気は、ユーラシア大陸のこの大変動期の中にありながら、なお韓国から去っていない。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一二年、正論大賞。